

南スマトラローカル林業見聞記

八 戸 英 喜

インドネシアの首都ジャカルタからの飛行機は、南スマトラ州とランポン州との州境のムスジ川付近から、スマトラ島上空に入り、広大な湿地帯を飛ぶ。最初に黒々とした湿地林を眺めることになるが、すぐに、それにも劣らぬ程広大な湿地の草原が出現し、雨期の晴天には、この大湿原は日光を反射して、まぶしく光る。45分間のフライトで、飛行機が下降し始めると、蛇行するムシ川に近づき、戦後、日本の賠償で建設されたムシ川のアンペラ橋や、パレンバンの落下傘部隊が降下したスガイゲロン、ブラジュの石油基地を見て、南スマトラ州の州都パレンバンの空港に着陸する。ここは石油で有名であるが、ゴムや木材、バンカ島の錫や胡椒等、さらに日本企業の協力で建設された肥料工場やセメント工場もあり、活気にあふれた町である。

筆者は1971年から約5年間木材輸出にたずさわり、1981年11月からの約2年半は国際協力事業団の南スマトラ森林造成プロジェクトの業務調整員としてパレンバンに長期に滞在した。その間に見聞した地元住民の林業について記述したい。

まず、南スマトラの概略を主要河川湿地帯、それに筆者がかつて丸太を集めた場所を中心に図-1で示した。この地域は地元の林業の特徴から、次のように区分できる。

① 湿地林のうちプライ (*Alstonia*) を伐採し、大部分を輸出したムシ川下流とバニユアシン地域 (州の北東部)。

② 同じ湿地林ではあるが、ムスジ川、ルンプール川からスジアン川に至る地域で、小径木のトレンタン (*Campnosperma*)、ブルボック (*Lophopetalum*) などの製材品をジャカルタに送った地域 (州の東部)。

③ ムシ川上流の丘陵林で、主としてメランティ (*Shorea*) を伐採した地域で、丸太は殆んどパレンバンに流送された。ただし、機械出しの丸太は輸出され、その他はパレンバンで製材された (州の西部)。

その他として1976年から本格化したアランアラン草原の植林対象地が、準平原の中央に位置している。

まず、1970年代の南スマトラ州の木材生産推移を森林局の統計からグラフで示すと図-2のようになる。丸太輸出が本格化した時代で、諸々の収入で、自転車通勤の

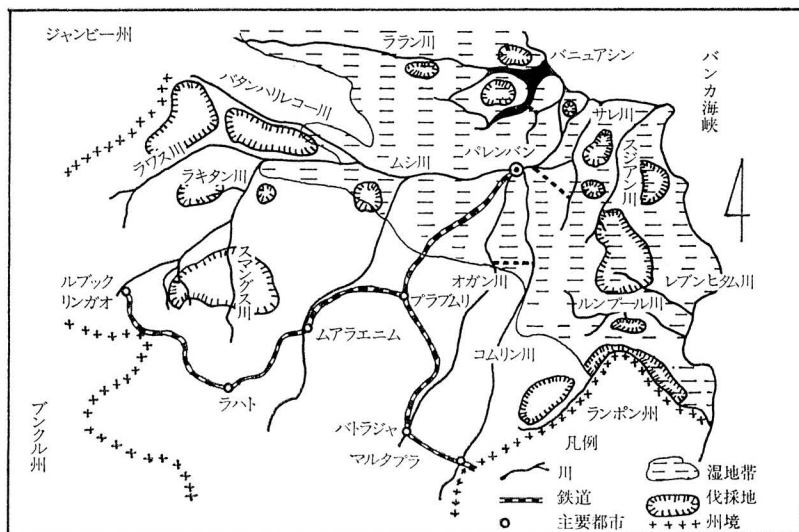


図-1 南スマトラ州伐採地域図

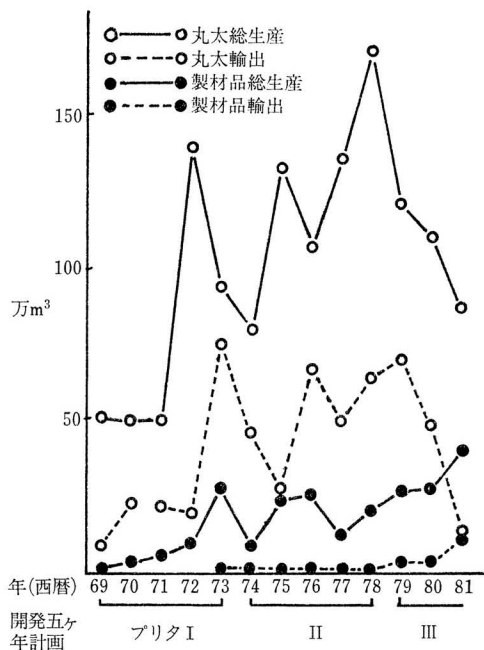


図-2 南スマトラ州の木材生産量推移

森林官も自動車を持てるまでになったと云われるほど、伐採業が活況を呈した。石油危機には生産量が落ち込んでいるが、丸太輸出が本格化する以前の倍以上の生産量であった。しかし、後半は、日本の木材業の慢性的不況やインドネシア国の丸太輸出規制で全体の木材生産量は急激に減少している。

さて、地元住民の林業活動を述べよう。

湿地林ムシ川下流とパニユアシン地区

パレンバンは湿地のなかの大きな島に例えられ、郊外にでると、水田や広大な湿地草原が広がり、全く森林はない。しかし、毎年繰返し火の入る湿地草原の一部に自生するグラム (*Melaleuca leucadendron*) の灌木林がみられ、うまく火をのがれたところでは、直径約 10 cm、長さ 4 m の土木工事用丸太がとれる。この地域で主として伐採されたブライの森林はムシ川の下流地域で、サレ川やパニユアシン周辺にみられた。小さな支流を探し、できるだけ森林内に入り込む。立木はバラン (長いナタ) で伐倒し、二人用の長い鋸で 4 m に玉切る。そして、玉切った丸太にあわせて溝を小運河に向けて掘っておき、これに丸太を落し込んで、雨を待つことになる。雨が降り、林内の水位があがっても、これだけではまだ不十分で、さらに満潮を待ち、このとき丸太を押し出す。小運河では、丸太の前後に木釘を打ち込み、それをロタン (籐) で結んで丸太を一列に連結し、引き潮にあわせて川まで引っぱり出す。このように木出しは水だのみだが、雨ばかりでなく、潮の干満に非常に影響されるので、泥まみれの仕事は夜間に行なわれることもしばしばあった。夜間作業となると、マンドール (人夫頭) がしっかりしていないと人夫がサボリ、時々、次の最高の満潮を待つことになる。木出しで大切なことは、決して 4 m 以上の長尺の丸太を期待しないことである。人夫の搬出経験がないためである。筏組はいたって簡単で、丸太を横にならべ、真中に番線を渡し、番線を短かく切って作ったUかんで各丸太をとめる。筏にワイヤローブをかけ、上潮にあわせて、タグボートでパレンバンに曳航する。以上がこの地域での一般的な伐出方法であるが、この他にジャワからの移民の水田プロジェクトでは立派な運河が作設されるので、これを利用して、よくブライが出された。とくに移住初期には、インフラ整備が遅れ、政府の補助だけでは不十分で、逃げだす者もいると云う話であったが、丸太の仕事は手っ取り早い現金収入になるので、水田作業よりも丸太出しに精を出す者もいた。こうゆうところでは、長距離をレール代りに敷いた小丸太の上に丸太をころがすこともあった。

これらの仕事を仕切った人々について、付き合った範囲でわけてみると、第1の事業主は、イスラム教徒で、メッカ巡礼をすると得られる称号のハジをもっており、伐採業とは別に、製材や建設の業務ももっていたり、村長だったりで、もともと資力があり、事業の才を持った人ということができ、規模の大きい伐採をして丸太輸出業者に売りつけていた。ただ、伐採権林区を取得するまでは、権力あるいは資力はなかったようで、その後に出会った時はだいたい丸太の仕事はやめて、建設業者や、スーパーマーケットの共同経営者となっていた。次はマンドール (人夫頭) クラスである

が、だいたい輸出業者から資金を借りて、山に入り、伐出した丸太で精算することになるが、このクラスになると、ハジだろがなんだろが、借りた資金で、自分の準備はするが、人夫の食料や伐採道具を準備しない。このため、山に出発できない者も出てくる。このため物品を貸し、人夫と一緒に伐採現場に押し込んでやる必要がある。それでも、丸太がうまく出せないときは簡単に蒸発してしまうので、半分は資金のコゲつくことを計算してかからねばならない。次は他人の丸太で相撲を取る連中、なにもわからないから、丸太の値段でも決めてやり、期待しないで自分のログボンドで待っていた方が無難で、たまに丸太を持って来ることがあった。

こうして伐出されたプライの大半はパレンバンから輸出され、南スマトラの丸太輸出货量の半分はこれで占められたと推定される。輸出の面からみると、*Shorea* 類の大径木を機械出したインドネシアの東カリマンタン地域と大きく異なることは、南スマトラの丸太輸出が地元住民によるクダクダ材に大きく依存していたことである。なお、プライは白身の、乳跡という孔のある軽い低質材で、日本では天井桟や安い家具の引出しの側板等に使われた。パレンバンでもメランティの板の半値位いで取り引きされていたと思う。

湿地林—ルンブール川を中心に

トルンスラパン村のルンブール川にたどり着くには、スピードボートで、ムシ川からオガン川に入り、運河でコムリン川を横切り、それから湿地の大草原を横断する。水路らしきものはあったが、複雑で、地理に明かるい地元出身の運転手を必要とした。水系を区切る岡地の運河を通して、水が逆に流れ出すと、また草原にでて、ようやく湿地のなかの浮島のようなトルンスラパン村に着く。このような岡地はタランと呼ばれ、一般に集落が形成され、焼畑や、乱雑に植えられた個人所有のゴム林がみられる。集落の形成された周囲は、だいたい草原になっており、森林へのアプローチは本流から支流に入り、さらに 1~2 km 位の草原を水びだしになって歩くことになる。森林内に入ると泥(ルンブール)になり、20~30 cm は足元がぬかる。ところどころ 3 cm 以上のトゲを持つ、アサンプヨ(ヤ) (*Salacca conferta*) と云うヤシがあり、歩行が困難である。雨期には水がたまり、淡水湿地林であるが、一度経験したら、二度と入りたくない泥沼の森林である。当時は輸出用のプライを探しており、約 8 km 位の奥地で、立派なプライを見た。ha 当り 40 m³ 以上はあったかと思う。その他にメランティパヨ(ヤ) (*Shorea platycarpa*) も散見された。これは完全な沈木で、大径木には殆んどセンターホールがあると思われる。調査時は気がつかなかったが、地元民の伐採した筏をみるとトレンタン、ブルボックが主体で、少しゲロンガン (*Cratoxylon arborescens*) などの丸太も含まれていたもので、これらは比較的林縁部に、大きくても 40 cm 位の直径のものがあった。その他、湿地帯で泥炭層のある地域、スジアン、レブンヒタム川の上流にはラミン (*Gonystylus*) があった。泥炭層の厚さなどは調べもしなかったが、溝の掘り具合では、2 m 以上はあったと思う。

これをさらに下流に下り、潮の影響を受ける地域になると、ニッパヤン (*Nyssa*

fruticans) が川の兩岸に整然とならぶ。夜にはこれにホタルが群がり、見事なクリスマスツリーにみえた。この内側にはニボン (*Oncosperma tigillarium*) が多かったようだ。そうして、海岸を守るようにマングローブ林があった。殆んど *Avicennia* だったと思う。

ニボンやニッパなどは河口付近の住民にとっては非常に大切で、住民はニボンで足場を築き、その上に家を建て、屋根にニッパを使用した。家々はニボンを柱に、板を敷き通路を作ってつなぎ、集落を形成している。

ついでに野生動物についてみると、サル、野豚、鹿などのほか、この地方で有名なのは象で、1982年にスジアン川の上流で、憲兵隊長が指揮をとり、2度にわたり象の移動作戦をやっている。スジアン川地域で国内移民プロジェクトを始めたためである。村の区長はその森林で、ワニを追いかけてまわっていた頃があったという。しかも、レブンヒタム川では、黒い細長い小ワニを飼育していたし、湿地林内の水溜りには乾期にもワニの食料となる魚がいたので、多分区長の話は本当であろう。ビアワと云う大トカゲは皮が500ルピアと云うことで追いかけてまわされていたし、マレーグマの子供をもらったこともあるほど多種であった。

さて、完全にパレンバンと隔離されたこの地域の林業は、製材品をジャカルタに供給することで、この主役は製材工場所有者であったが、そのバックには、帆船ピニスで島嶼間の海上運送に重要な役割を果たしているブギス人の回船間屋がいた。このブギス人の所有する帆船がルンプール川からの製材品を一手にジャカルタに運んだが、工場主はこのブギス人から資金を借金し、その一部を伐採資金として、農民に少しずつ貸付け、木をきらせたり、工場の運転資金とした。勿論、資金的に独立している工場主も10人位はいて、製材品の価格もしばられていなかったし、工場も3軒位いは所有して、しっかりした経営をしていたが、信用を失なって前渡し金にありつけない工場主も多かった。後者は、需要が増加したときだけ、他の工場の賃挽きをするとうことになる。

伐採される樹種は、直径25~40cmの赤身のトレンタンで、木出しの水路もパラソで清掃する程度で、潮の干満の影響を受けることなく、雨期の雨だけたよることになる。多量に伐採する者はだいたい工場と資金面でつながりがあったようだが、値段をあげれば、簡単に他の工場に筏は流れたようである。

製材工場は、ニッパヤンの屋根をかけただけの簡単なものであったが、機械室だけは側板が打ちつけてあり金網の窓があった。周囲には2、3の人夫小屋が建てられた。動力は20~30馬力のディーゼル、鋸は丸鋸である。このような工場が、1973年当時、ルンプール、レブンヒタム川に、230軒はあった。但し、稼働している工場は2~3割位で、廃居並みのものもあったが、一旦、製材品の値上がりがあると息をふき返すのである。

製品の寸法規格は、厚さ3cm、幅20cm、長さ4mの板、5cm×7cm×4mの角材であったが、実際には、厚さは約2.5cm以上、但し1cmの誤差はざらだった。幅は18cm、長さは380cmである。しかしジャカルタで製品の価格があがる

と、減寸はさらにひどくなる。ブギス人への納入価格が、前金の関係ですでに決められていて、値上げができないものだから、材積を盗むことで、カバーすることになる。製材請負人夫は、量を確保するため、腰入れもしていない、目立ての不十分な丸鋸に向かって、ひたすら丸太を押しまくり、板の枚数をかせぐことになる。おかげで 1 m³ 毎の積み重ねは枚数勘定で行われるので凸凹になる。これに対する消費者側からのクレームも当然あったが、10 年来何等の改善もなされなかったのは、役人がただ税金を取るだけでいくらかでも製材工場の許可証を出した州政府の工業部、伐採の規制や製品規格の指導ができなかった森林局に責任があらう。

このルンプール川、レブンヒタム川地域の製材工場も 1981 年にパレンバンに舞い戻ったときには、殆んどスジャン川地域に移動していた。丸太の供給が底をついたためである。ルンプール川時代の前は、ジャカルタ寄りのムスジ川から供給されたそうである。林業のためには、ムスジ、ルンプール、スジャン地域をうまく回転させなければならないのだが、湿地でも森林の草原化は進んでおり、あの泥沼の森林も、10 年に 1 度とかの異常長乾期に見舞われると、さすがに部分的に乾燥し、火の犠牲にもなる。さらに国内移民プロジェクトも森林を伐開するので、まず、この伐採地の回転は不可能と思われ、林業に従事した住民も、スジャン川地域での伐採が終れば、川での魚取りに専念せざるを得ないかも知れない。ルンプール地域での住民の仕事は、キャッサバやゴムもあって、農民が自転車に満載して、集荷場に押して行く光景もみられるが、雨期の伐採業と並んで、乾期の川での魚取りが重要な仕事である。この時期が近づくと、村からサンパン（小舟）に乗って、バガンと云われる魚取りの小屋に移り住み、定住するものもある。乾期に魚取りをするのは雨期の洪水が引き、森林や、草原から魚が川に集中するのを一網打尽にすると云うことで、このため各支流には漁業権があり、毎年村役場で入札が行われた。当時で、20~30 万ルピアから 100 万ルピアもするところがあったことから推定して、漁獲も相当に多かったものと思われる。

ムシ川上流の丘陵林

スピードボードでひたすらムシ川を 溯ることになる。*Shorea* 林であるが、カリマンタンなどの *Shorea* と比較すると確実に小型である。メランティの他には少しジェルトン (*Dyera*) も伐採されたし、地元民はブタナン (?) やメルバオ (*Intsia*) の沈木を森林内で手挽きして、柱や板にしていた。この地域では機械出しによる輸出丸太が多かったが、それにも負けず、バランと長い手鋸による地元住民の伐採は活発で、パレンバンの現地製材の供給地であった。ここでは、まず伐倒玉切り、さらに筏組用に丸太の前後に穴をあけ、剝皮するところが、これまでのところとは異なるが、それを小さい沢にころがして落し込み、雨期の大雨を待ち、流し出す。クダクダとは云え、サラワクなどで見られた木馬で人間が引き出すのを一度も見ることにはなかった。西カリマンタンでも人間が木馬で丸太を引き出すことを見たことがあるが、どうもスマトラ人は丸太をころがす程度の共同作業はやるが、引き出すなどの共同作業は苦手のようなのである。水牛に引かせることはときにあるらしく、この場合は丸太の鼻が斜

めに削られて滑りやすくされている。しかし大部分は洪水頼りで、洪水にならなければ、木出しは翌年の雨期待ちと云うことにもなった。

筏組を終わったら、寝泊りする小屋をつくり、ナベ、カマを積み込んで、のどかにムシ川を下ることになる。しかし、こののどかさも、川の曲りが急なところになると破られる。筏の前後には、舵取り用の大きな櫓が二本ずつつけられていたが、うまくカーブするために、必死にこれを漕がねばならなかったし、これで勝負がつかなかったら、繫留用の籐で編んだロープを持って川に飛び込み、岸の立木でブレーキをかけて、やっとカーブすることになる。ムシ川の流れに従って、いったいどれ位いかかってパレンバンに着いたかは定かでない。当時米 1kg 約 50 ルピア、丸太の値段は、1 m³ 当り 1,200 ルピア位이었다と思うが、焼畑外の別途収入としては効率の悪い仕事に思われたが、焼畑農民にとっては、慣れた仕事でまとまった現金収入が得られるので、大切な仕事であったと思われる。

以上の三地区で、南スマトラにおける地元住民による木材の伐採や製材業の様子が概ね伺える。プライの一部を除けば、大体、4~5 人のグループで、決して規模の大きい企業的伐採になることはなかったが、これに従事する農民は多く、相当多くの丸太を搬出したと思われる。この生産量を、図-2 によって推定してみると、丸太輸出量がクダクダ出しのプライと、機械出しのメランティで構成されているから、次の式が考えられる。

「丸太総生産量－丸太輸出量÷2＝地元住民のクダクダ生産量」となる。バランと手鋸だけであったが、いかに地元民によるクダクダ材の伐採が多かったかがわかる。

次に法律上からみると、1971 年筆者がパレンバンに駐在した時に、すでに森林開発帯は、すべて新しくコンセッション（伐採権林区）として区画され、いわゆる森林開発会社に与えられ、計画的に伐採されることになっており、旧来の住民の伐採の殆んどが、規則上では、不法伐採のカテゴリーに入るものであった。外来者には理解できないが、これらの不法伐採による丸太は出て来たところで、森林局に税金が納められ、製材工場に引取られて、製材され販売された。また製材品をジャカルタに送る場合には、納税書をもとに、島嶼間交易の許可書を得て、船積書類を作成し、ブギス人の帆船で、ジャカルタのスンダクラバ港やカリバル港に送られた。全く正規の物品として認められていたことになる。

伐採権林区の所有者も盗伐防止を試みることはあった。しかし農民の林区内侵入を防ぐことは不可能であったし、丸太の現物を押えてみても、これを取り上げる場合は市場価格で、その農民に対して補償しなければならなかった。輸出市場のいいときは、そのようなクダクダ材でも輸出できる状況になったが、今度は、伐採計画外の輸出許可取得が困難で、殆んどの場合、見て見ぬふりをするのが無難であった。このようにして、新しい法律は施行され、パレンバンにも大規模な製材工場や合板工場が建てられ、製品の輸出ができるようになったが、他方不法伐採とされた地元民の伐採や製材も、輸出に刺激されながら、活発に続けられ、新しい規制に吸収されることなく、森林を蚕食しているのである。